

つなぐ 61

2021年秋号
令和3年9月発行
第16巻第3号
(通巻61号)

地域医療を考えるペガサス情報誌



看護への情熱を
守り育てる。

Special



教育と臨床を
一直線で繋ぐ。

Pegasus
Tsubasa

令和3年4月、河内長野市に

ペガサス大阪南看護学校が開校。

第1期新入学生89名を迎え、

新たな看護基礎教育がスタートした。

専任教員はすべてペガサス育ちの看護師たち。

これまで蓄積してきた



ペガサス大阪南看護学校
専任教員
田中 千恵



ペガサス大阪南看護学校
専任教員
高橋 真帆



ペガサス大阪南看護学校
専任教員
島本 祥子



臨床現場での卒後教育（看護師免許取得後の教育）の
ノウハウをベースにした実践的な

卒前教育（免許を取得するための看護基礎教育）が
始まっている。

長引く新型コロナウイルスの感染拡大という

難しい局面での船出になったが、

学校では生き生きとした

学びのシーンが繰り広げられている。

今号の『つばさ』では、

教育と臨床を一直線で繋ぎ、

学生の指導に情熱を傾ける教員、

そして病院職員たちの姿を追った。



ヘガサス大阪南看護学校
顧問
山村 寿美子



ヘガサス大阪南看護学校
教務主任
三崎 美保



馬場記念病院
看護部長
高橋 睦子



ヘガサスリハビリテーション病院
看護師長
成田 志保



教えたいのは「看護の心」。

ペガサス大阪南看護学校では、新型コロナウイルスの感染状況を見極めながら、可能な限り対面授業を取り入れ、実践的な演習にも力を注いでいる。そんな教育の現場をレポートした。

基礎看護学の演習で、

介助の実際を指導する。

令和3年7月のある日、ペガサス大阪南看護学校の実習室



では、基礎看護学の演習が行われていた。

この日のテーマは、「体位変換と車椅子への移乗」である。仰臥位(ぎょうがい…ベッドで仰向けになっている姿勢)から、長座位(ちようざい…両脚を伸ばし

た状態で座った姿勢)、そして、端座位(たんざい…ベッドの端に、足を下ろして座った姿勢)まで患者さまの体位を変え、車椅子への移乗介助までのシミュレーションを行う。

教員の島本祥子が最初に、学

生を患者さま役にしてデモンストレーションを行った。「教科書では、このように患者さまの肩甲骨の奥まで腕を差し込み、起き上がりを介助します。でも、臨床の現場では、ベッドの背上げ機能を使って患者さまに起きていただく方が多いです。どちらが患者さまの体に負担が少ないか、両方やってみてください」。教科書の知識だけでなく、臨床現場のやり方も教えるのは、島本が常に心がける指導方法だ。「令和2年春まで臨床の現場にいたので、その経験を最大限伝えていきます。そうすることで、現場ではどんなことが要求されるのか、考えてほしいと思っています」。

デモンストレーションの後、学生たちはグループに分かれて、患者さまが自立しているケース

と全介助のケースの両方について、患者さま役、看護師役を交代しながら体験していく。島本の他、3名の教員が入り、学生たちに細かくアドバイスをしていった。

気づいてほしいのは患者さまへの心遣いの大切さ。

演習を通して、島本は教室内を巡回し、学生たちにこんな言葉をかけていた。「介助する前に、患者さまにきつちりと声をかけて説明してください。患者さまが安全に車椅子に移乗できるように一つひとつの技術を丁寧に行きましょう」。

この演習の狙いは何か。演習は介助の技術を学ぶ場だと思われがちだが、そうではない、

「若い人は素直で、考え方も柔軟で、逆に教えられることも多い。だから、教育つてすごく楽しいんです」と島本教員。



基礎看護学の演習。
教員の説明とデモンストレーションを、真剣に見つめる学生たち。



戸惑っている学生を見つけると、島本はすぐに駆け寄り、介助の技術をわかりやすく説明する。

と島本は言う。「第一は、患者さまに配慮する大切さに気づくことです。体位を変えるにしても、相手にどんな言葉をかけると安心していただけるか、どうすれば楽に動いていただけるか、と考えることが大切です。患者さま役、看護師役の両方を体験することで、患者さまの立場になつて考える大切さやコミュニケーションの重要性を学んでほしいと考えています」。

フレッシュな姿勢で 学びを吸収する 学生たち。

演習を体験した学生たちは、どのように受け止めたか。3人に話を聞いた。

「動画を見て事前に学習しましたが、実際にやってみるとすごく難しく、看護職の大変さを改めて実感しました」と話

すのは、上村美貴さん。小さい頃、大怪我をして治療を受けたのが馬場記念病院。その出来事がきっかけとなり、看護師への憧れを抱き、進学を決めたという。「知識や技術だけでなく、患者さまとの関わり方、コミュニケーション能力も身につけていきたい」と意気込みを語る。

「先生がいつも横にいてくれるので、わからないこともすぐに聞けます」と話すのは、田畑亜弥さん。少人数で学びたくてこの学校を選んだという田畑さん、レポートの提出をうっかり忘れたときも、先生がすぐ声をかけてくれるなど、「親身になってサポートしてもらっています」と感謝しつつ、看護の学びを通じて、「困っているすべての人を援助できる人間性を磨いていきたい」と意欲を見せる。

「臨床経験の話がためになります」と言うのは、中澤斗希（とき）さん。「この演習もそうですが、臨床の話をいっぱい聞けます。先生方の看護に対する気持ちがとても熱くて、モチベーションが上がりますね」。

中澤さんは、病院で看護助手として働いてから、入学した。新型コロナウイルス感染症の対応に追われる看護師たちを間近に見て、自分も資格を持つて



「車椅子の患者さまを、気分転換のために談話室へお連れする」という想定で行われた演習。患者さまへの声かけの大きさを、島本は熱心に語る。

役に立ちたいと思ったという。中澤さんのように、社会人を経験して入学してきた学生も多い。「みんなの話を聞くと、各人が自分なりの看護に対する情熱を持って入学してきたんだなと身も引き締まる思いです。その素直な気持ちを大切に、看護に対する熱い心を育てていきたいですね」（島本）。

病棟看護師から 教員への キャリアを拓く。

島本が教員を志願したのは、今後のキャリアを相談する師長面談がきっかけだった。「看護教育に興味がある」という話をしたところ、タイミングよく看護学校の教員の道をすすめられた。島本は平成20年、馬場記念病院に入職。北館5階病棟（整形外科・脳神経内科の病棟）に勤務してきた。その間、実習に訪れた看護学生の指導や新人教育に携わる機会が多く、気がついたら、後輩の成長や指導のことを考える時間がとても長くなっていった。「自分が今やりたいのは、教育ではないだろうか」。そう思ったところで、ペガサス大阪南看護学校が開設される、というニュースが飛び込んできたのだ。

こんなチャンスは二度とない。島本は「ぜひ頑張らせてほしい」と即答した。令和2年5月から大阪府専任教員養成講習会に通い、令和3年2月、専任教員の免許を取得。島本は今、教員1年生として、患者さまに寄り添う看護の心を伝えようと日々努力している。

看護師は 人と繋がりながら 成長できる職種。

島本と同じように、昨年、大阪府専任教員養成講習会に通い、専任教員の免許を取得して教員になったのが、高橋真帆である。

高橋(真)は平成24年、馬場

「臨床体験を話すと学生の目が輝きます。
現場の話もいっぱいして、
看護の魅力を伝えていきたい」(高橋教員)。



この日は実習室に10台のベッドを並べ、4~5人ずつのグループに分かれて演習を行った。

記念病院に入職。北館2階A病棟のSCU(脳卒中ケアユニット)で、超急性期の看護に携わってきた。「9年間、同じ病棟に勤務し、何かステップアップの道はないかと模索していたとき、教員の募集があったので、思い切ってチャレンジしました。講習会で、同じ教員をめざす仲間たちと出会い、看護つてやっぱりす

ごく楽しい」ということを実感。その楽しさを、学生たちに伝えたいですね」と話す。

看護の魅力とは何か。「看護師は、人の生まれる瞬間から亡くなる瞬間まで関われる、稀少な職種です。常に人と関わる仕事ですし、患者さまがよくなっていく過程を間近で見ることができます。また、他の医療職との関わりも深く、人と繋がりながら成長できる喜びがあります」。

高橋は令和3年度、看護技術や日常生活援助技術などの授業を担当している。「看護師にとって、フィジカルアセスメント(問診・視診・聴診・触診・打診の技術を用いて患者さまの身体の状態を観察したり評価したりすること)は基本的なスキルです。脳神経外科の超急性期で鍛えた知識と技術を、わかりやすく伝えたいと思います」と話す。



高橋(真)たちも指導に加わり、学生たちの質問に答え、アドバイスする。教員と学生の距離は非常に近い。



クラスの副担任として、学校の備品の扱い方などについて説明する田中(千)。
「みんなが安心して学校生活を送れるようにサポートしています。
何でも気軽に相談してもらえる教員になりたいですね」と意欲を燃やす。



教員の言葉をメモする学生たち。
「対面授業はオンラインと違い、
仲間と勉強できるからうれしい」と言う。

看護の基本は 相手を思う コミュニケーション。

もう一人、ペガサス育ちの専任
教員を紹介しよう。田中千恵。
平成23年馬場記念病院に入職
し、北館4階病棟(内科・呼吸器
内科・循環器内科の病棟)で研
鑽を積んできた。田中(千)が教
員を志願したのは、自身の後輩
指導のつまずきからだ。病
棟では新人を指導する難しさ
を年々、感じるようになってまし
た。私の気持ちが熱過ぎるの
か、何でわかってくれないのだろ
うと思うことが多くなり、悩ん
でいたんです。それで、一から教
育を学ぼうと専任教員養成講
習会に参加。看護を教える知識
と技術を学び、相手に伝わらな

いのは自分自身に問題があった
こと、自分が変わらなないとコミュ
ニケーションを深めることはでき
ないことに気づきました」。その
反省を踏まえ、田中(千)は今、
どんなときも噛み砕いた表現に
配慮し、学生の理解度を確認し
ながら、丁寧に指導している。

相手のことを思い、相手に伝わ
る言葉で話す。それはそのまま
看護に繋がる心得だ。「私自身
の気づきを、学生たちに伝えてい
きたい。患者さまの気持ちになら
て考え、患者さまに寄り添う心
を学んでほしいと思います」。田中
(千)の担当科目は、「食事と排
泄」などの看護基本技術。単に
教科書通りの授業をするのでは
なく、食事が疾患の治療にとって
いかに大きな意味を持つかなど、
自身の臨床体験を踏まえて熱
心に指導している。

臨床現場から 学生たちを教え、支える。

演習が模擬的に看護を学ぶ教育であるのに対し、実際の看護を体験するのが「臨床実習(以下、実習)」である。ペガサスでは看護学校の実習の受け入れ施設の一つとして、学生たちの教育をバックアップしている。ここでは、学生たちの学びを支える臨床現場の取り組みを見ていきたい。

患者さまとリアルに触れ合う 臨床実習の学び。

令和3年7月上旬、2日間にわたり、ペガサス大阪南看護学校で初めての実習が行われた。テーマは「病院の環境を学ぶ」。ペガサスリハビリテーション病院は、実習の受け入れ先の一つとして、周到な準備を行い、学生たちを迎えた。

2階病棟の看護師長、成田

志保に話を聞いた。

「看護師が患者さまにどのように関わっているかを見たり、セラピストによるリハビリテーションを見学してもらいました。急性期の治療を終えた患者さまに在宅へ戻っていただくために、多職種が協力して取り組んでいることを知ってもらいました」。

実習に先立ち、成田は学校の教員らと2日間のプログラムをじっくり練り上げた。「学校の学びと臨床現場の間には、や

はり隔たりがあります。その隔りを少しでも埋め、よりリアルな学びが得られる実習になるよう意見を出しました。ペガサス大阪南看護学校の学生たちの一部は、これから一緒に働く仲間になるかもしれません。そんな期待も込めて、これからもどんどんアイデアを出していきたいと思います」と話す。

初めての实習で、学生たちは緊張していたが、2日目には患者さまと笑顔でコミュニケーションを取る姿も見られた。



看護師をはじめとした医療職が、患者さまとどのようにコミュニケーションを取っているか、間近に見て学ぶ。

「患者さまと話して楽しかったという声も聞かれ、まずはいい一歩を踏み出すことができました」と、学生たちを引率した高橋(真)は振り返る。

ペガサスグループの

さまざまな施設で

多様な看護を学ぶ。

ペガサス大阪南看護学校の実習は、馬場記念病院やペガサスリハビリテーション病院、クリニック、訪問看護ステーション、療養所介護施設、訪問リハビリテーション、介護療養型老人保健施設、特別養護老人ホームなど、ペガサスグループのさまざまな施設で行う。さらに大阪南医療センター、その他の国立病院機構病院での実習も加え、教育の質を確保していく計画だ。

学生たちの実習をスムーズに受け入れるために、ペガサスの看護部では、3カ月に1度、臨床実習指導者会議を実施している。その会議に出席している馬場記念病院の看護部長・高橋睦子は多様な施設での実習について次のように話す。「今や、看護師が活躍する場所は病院だけでなくありません。訪問看護ステーション、介護施設、さらにペガサスでは医療的ケアを必要と

するお子さんを預かる保育園でも看護師が活躍しています。多様な場所で、多様な患者さまを対象に、看護の力を発揮できることを、実習を通じて実感してほしいですね」。

看護師の学びは

卒業後も

ずっと続く。

高橋(睦)はまた、実習を通じて「看護師が学び続ける専門職である」ことも伝えていきたいと話す。「看護師の責任を果たそうと思ったなら、ずっと勉強していかなくてはなりません。学びが積み重なって自立した専門職になっていく、ということも伝えていきたいですね」。

ペガサスでは、卒業教育プログラムを用意して、看護師一人ひとりが「なりたいたい看護師」をめざすキャリアプランを設けている。たとえば、スペシャリストをめざす人には、認定看護師(特定の看護分野において、熟練した看護技術と知識を有する看護師)の資格を取得する道を用意し、全面的にバックアップしている。「多様な看護領域で認定看護師を育てることで、病院全体の看護の質の向上に繋がっています。また、ペガサス大阪南看





看護師になりたい——その夢を叶えるために、日々、学びを深める学生たち。

へガサスの看護
新しい
挑戦

特定行為に係る看護師の研修制度

特定行為に係る看護師の研修制度は、平成27年10月に施行。特定行為とは、経口用気管チューブまたは経鼻用気管チューブの位置の調整をはじめとした38の行為。それぞれの行為に必要な実践的な理解力、思考力および判断力などを養うために、研修を受けるものだ。馬場記念病院は、「創部ドレーン管理関連」「栄養および水分管理に係る薬剤投与関連」など、いくつかの特定行為に関する指定研修機関となった。

「護学校ができたことで、(教員になる)というキャリアプランも新たに加まりました。選択肢が増えたことは、卒業教育において、とても素晴らしいことです」と高橋(睦)は話す。

さらに、令和3年4月から、馬場記念病院は特定行為に係る看護師の研修制度の指定研修機関(コラム参照)になった。特定行為に係る看護師は、多忙な医師の業務の一部を担うスペシャリスト。医師の働き方改革論議が進むなかで、期待されている新しい看護師の姿だ。「外部の医療機関で働く看護師の教育にも関わっていくことになり、一層責任を感じています。時代のニーズに応える看護師を育てる場としても、しっかり貢献していきたいと思います」と話す。

「実習を通じて、多職種によるチームの取り組みについても学んでもらいました」(成田)。







生活に視野を広げた 看護教育の追求。

ペガサス大阪南看護学校の準備が始まったのは、約1年前の令和2年。国立病院機構大阪南医療センターより大阪南看護学校の運営を引き継ぎ、開校の準備を進めてきた。ここでは、学校運営の舞台裏を探ってみた。

初めての学校運営、 手探りの スタート。

令和2年4月、看護学校の4階に準備室が開設され、開校に向けての準備が本格的にスタートした。教務主任に就任した三崎美保は次のように振り返る。「学生募集の案内からシラバス（講義などの内容や進め方を示す計画書）の作成、講師集めなど、すべてゼロからの挑戦でした。不安も大きく、困難なこともたくさん

ありましたが、田中恭子理事（副学校長）をはじめ、ペガサスグループの職員の皆さんが全力でサポートしてくださり、無事に走り出すことができました」。

しかし、開校後も決して順風満帆とはいかなかった。新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、入学式を終えてまもなくオンライン授業に切り替えることを余儀なくされた。「本校は全学生に対して電子教科書を採用しているため、開校時からタブレット型端末で授業を行っていました。オンライン授業

の準備は、教員のシステムの理解、学生の出欠確認・外部講師との連絡調整、ルールづくりなど大変でしたが、今回電子教科書の利点は充分活かされたと思います。その体制や授業のルールづくりも大変でしたね」と三崎。慣れないオンライン授業では、なかなか学生の反応がわかりにくく、教員たちもどかしい思いをしている。その思いは、授業を受ける学生も同様だった。オンライン授業は質問もしづらく、友達も作れず、生活リズムも維持しにくい。教員たちは必要に応じて、

個別にこまめに連絡し、学生たちがモチベーションを維持できるようにサポートしてきた。



ペガサス大阪南看護学校では、学生全員がタブレット型端末を持ち、オンライン授業や演習などに活用している。



「教育はエネルギーのいる仕事。大変だけど、充足感を感じています」と三崎。

**教育方針を固めるために
侃々諤々の
議論を繰り返した。**

オンライン授業の体制づくりと同時に、教員たちには、令和4年度の新カリキュラムの編成という大きな仕事が続いてきた。このカリキュラムの編成は、厚生労働省が発表した看護基礎教育の第5次改正に基づくもの。人口や疾病構造の変化、療養の場の多様化などに伴い、看護職には多様性・複雑性に対応した看護を創造する能力が



専任教員は、すべてベガス育ちの看護師。
学生のためにどんな環境やルールを整え、どんな授業をしていくか、常に話し合っている。

求められるようになった。そうした時代の変化を踏まえ、14年ぶりに看護基礎教育が見直されることになったのである。

教員たちは4月から毎週1回会議を開いて、活発な議論を繰り返り広げた。しかし、教員それぞれのキャリアも看護観も異なる。看護教育に対する認識を一つにまとめるのに非常に時間がかかったという。「たとえば、臨床判断するための基礎的能力を身につける」と表現する場合でも、そもそも臨床判断とは何か、基礎的能力は何を指すのか、というところで異論、反論が噴出しました。それぞれに譲れない思いもあり、平行線のまま

という日もありましたが、全員が認識が統一されなければ、教育内容にずれが生じます。単に新カリキュラムを編成するのではなく、当校の教育目標なども見直し、卒業時に期待される学生像を新たに作り込みました。そう話すのは三崎である。

約3カ月にわたる密度の濃い議論から、三崎たちは「基礎的能力、倫理性、調整能力、地域理解力、人間関係力、生涯学習力」の6項目を、卒業時に学生が備えるべき能力として絞り込んだ。「今回、クローズアップしたのは、地域理解力、人間関係力、生涯学習力です。地域をよく理解し、患者さまや他職種と信頼関係を築き、生涯にわたり自主的に学び続ける看護師を育てる。このあたりの項目については、全教員の意見が速やかに一致し、ベガスらしい方向性を示していると思います」と島本は話す。

**「地域・在宅看護論」を
充実させる。**

今回の看護基礎教育の改正で、在宅看護論が「地域・在宅看護論」に名称変更され、内容が拡充されることになった。地

域で生活している人、看護を必要とする人への看護を重視する考え方がより鮮明になったといえるだろう。

「地域・在宅看護論」の学びを深めるために、ペガサス大阪南看護学校では「家族看護論」をカリキュラムに加えた。その狙いはどこにあるのだろうか。「地域で生活する人々を支援する上で、家族はとても重要な存在です。患者さまだけでなく、ご家族を理解し、ご家族のケアについ



「時代が変わっても、看護の核となるところは外さないでほしい」と、山村顧問は話す。

ても力を発揮できる看護師を育てたいと考えました」と田中（千）は説明する。さらに地域を理解するには、地域連携が重要なキーワードになる。「入院して在宅に帰る人たちにどんな支援が必要か、理解を深めることが必要になります。たとえば、病院の地域連携室などの実習を通じて、退院調整看護師や医療ソーシャルワーカーの役割についても学んでもらう計画です」と、田中（千）は話す。

看護教育において 変わるもの、 変わらないもの。

こうした新しいカリキュラムの編成について、山村壽美子顧問に総括してもらった。「今回の看護基礎教育の改正の軸は、より地域を重視し、地域のなかで生活する人々をケアする看護師を育てることだと思います。看護の場所は病院だけではなく、看護を必要とする人がいらっしやる場所すべてが対象になります。患者さまが自宅で生活していて、健康障害を来して入院して、病状が落ち着いたら、自宅に帰ったり、施設に入所したりしますよね。その時間軸をずっと繋いで看護していくよう

なイメージですね。学生たちは早い段階で生活の現場を見学し、生活へと視野を広げながら学んでいくことになりました」。

もう一つのポイントとして、山村は「コミュニケーション力の教育を挙げる。卒業時に期待される学生像として、人間関係を柱の一つに掲げていますが、コミュニケーション能力は重要だと思います。まず患者さまと信頼関係を築くためのコミュニケーション力、そして、患者さまの症状や気持ちを他職種に伝えていくコミュニケーション力が看護師には必要です。相手との関係を築き、多職種連携の要となるようなコミュニケーション能力の育成に力を注いでいかなければならないと思います」。

その一方で、時代が変わっても、決して変わらないものがある」と山村は話す。「変わらないものは、看護における（手当て）という概念だと思います。看護の発祥は、母親が無償の愛で子どもを慈しんで育てることにあります。母親の愛情深いスキンシップと同じように、患者さまに触れて癒そうとする姿勢が大切です。（手当て）という看護の本質を外すことなく、思いやりのある看護を教育していきたいと思っています」。



看護師育成への思いを語る。

ピュアな熱い心を持った 看護師を育てたい。

社会医療法人ベガサス理事長 べがサス大阪南看護学校 学校長

馬場武彦

医療と生活を

見つめる

看護師の育成。

動き出したベガサス大阪南看護学校の運営。学校長を務める馬場武彦は、どのような看護師の養成をめざしているのだろう。「看護師に必要な能力はいろいろありますから、一言で表現するのも難しいものです。そのなかでもベーシックな部分でお話ししますと、病気を治すところから、その先の生活まで考えて患者さまを支えられる看護師を育てたいという強い思いがあります」と話し、次のように続けた。「病院の役割は命を救い、病気を治すことだけではありません。懸命な治療を

尽くし患者さまの病状を改善した上で、その先にある生活を末長く支援するところまでが私たちの役割です。私たちベガサスはそのように考え、ベガサストータルケアシステムの構築を進めてきました。看護師にも、そのように広い視野を持つて看護を実践してほしいですし、そうした思考のできる専門職を育成することが私たちの使命だと考えています」。

べがサストータルケアシステムとは、救命救急から急性期、回復期、慢性期、在宅支援までにわたり、シームレスに医療を提供する体制づくり。べがサスグループでは、訪問看護ステーションやデイサービスセンター、介護施設などの関連施設を設置し、退院後も患者さまが継





続いてケアを受けられるような仕組みづくりを強力に推し進めている。「病院、施設、在宅

それぞれのシーンで、患者さまを第一に考えてケアする看護師が必要で。医療や介護に関わる多職種と協力しながら、患者さまそれぞれの生き方や

暮らしを支える看護師を育てていきたいと思えます」。

看護師になりたい というまっすぐな心を 守り育てていく。

ペガサス大阪南看護学校の



第1期生として、歩き始めた学生たち。彼らに対し、馬場は「この3年間で看護師の土台をしっかりと作りつてほしい」とエールを送る。看護師の土台とは、どんな

ことだろうか。「たとえば、看護に必要な倫理観や道徳的な感性、コミュニケーションの力など、いろいろあります。大きく言うと、人間性を育むということに尽きるかもしれません。医療人としての豊かな素養を培って社会に出れば、卒業教育を通してぐんぐんと成長します。細かい技術の習得というよりも、そんな〈のびしろのある人〉に育ってほしいと考えています」。

同時に馬場は、学生一人ひとりに対して「何よりも看護師をめざすピュアな思いを大切にしてほしい」と訴える。「学生た

ちは、看護師の国家資格の取得をめざし、たくさんの知識と技術を学んでいくことになりま

す。ときにはつまずいたり、壁にぶつかるともあるでしょう。そんなとき、なぜ看護師をめざしたのか、という初心を思い出してほしい。そして、そのまっすぐな思いを大切に忘れないでほしいと考えています。そのために、教育に携わる職員はみな、常に正しい医療や看護を指し示し、ピュアな心を傷つけないことなく守ってほしいとも願っています」。

教育から臨床を一直線で結びチャレンジは、今まさに始まったばかり。馬場は一人ひとりのマインドを大切にしながら、熱い心を持つ看護師を育て、地域へ送り出していくこうとしている。



つばさ 61

2021年秋号
令和3年9月発行第16巻第3号
(通巻61号)

地域医療を考えるペガサス情報誌

発行人 馬場武彦
編集長 平岩敏志
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
発行 HIPコーポレーション
社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東 4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

今号の第2特集は休載です。毎回、馬場記念病院と連携し地域医療を支えてくださっている診療所をご紹介しますが、診療所の先生方が新型コロナウイルス感染症のワクチン接種などで多用のため、また感染予防のために取材撮影を控えることとなり、掲載を見送らせていただくこととなりました。

つばさ 61

地域医療を考えるペガサス情報誌

医療従事者には、
誰かの役に立つ仕事がしたいという思い、
自分や家族を、病気や怪我から救ってくれたという体験から、
この世界に入る人が多くいます。

最新の知識と技術を学ぶなか、
どこまでも続く高度な専門性に驚きつつも、
一つひとつの生命の尊さに向き合い、
理想と現実との隔たりを知ってなお、
正しい医療と、
そのなかで自分らしく生きるために、
さらに学び、深く学び、専門職としての力の蓄積に全力を注ぎます。

支えるのは、「人のために」という混じりけのない思い。

彼らの混じりけのない思いを、歪めず、壊さず、
貫き通すことができる環境を、いかに作り続けるか——。
教育機関、医療・介護・福祉の現場のすべてで実現してこそ、
地域社会の未来が照らされる。
医療従事者教育の根幹は、
ここにあるのではないかと、私は考えています。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦